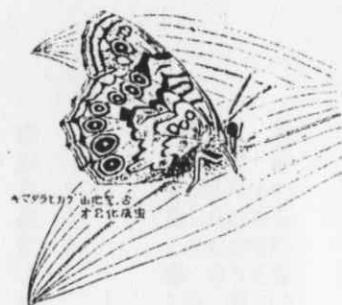
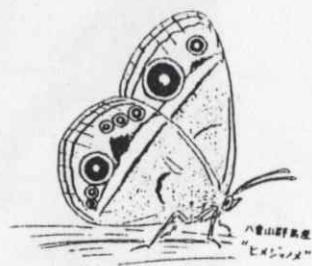




アマダラヒカブ 山地等. 6
オオヒメ蝶

新・真弓語録



八重山群島産
"ヒメシロノメ"

私は下駄をぬいではだしになった。息をこらして、
無心に手製の不細工な網を振った。

1966 「おもいでの子」オオミドリシジミ

ちやつきりむし(6)

なぜそんなことを研究するのか。それは、好きだからや
るのである。理屈はあとからつけければ、済むことなのだ。

1987 虫との出会い 昆虫と自然22(11)

蝶は珍品でも普通種でも何でも好きだ。

1990 TSU I SOカスタム虫界紳士録

流行を追う者は流行に遅れる

1990 TSU I SOカスタム虫界紳士録

1993 静岡県高教組新聞(149)

付近の家の前にあった竹ぼうきを手にとり、必死で三〇
メートルばかり追いかけたが、チョウは人家の屋根を越え
て姿を消した。私はしばしばう然としてそこにたたずん
でいた。

1979 ギフチョウーその分布と食性

チョウー富士川から日本列島へ

このチョウを手にしたとき、私の両足は興奮のためにガタ
ガタとふるえていた。

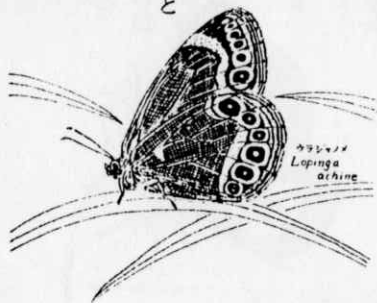
1979 ギフチョウーその分布と食性

チョウー富士川から日本列島へ

私は緊張のあまり、ネットを振るのも忘れて、ぼう然と
その姿を眺めるのみであった。

1986 今月のむし オオイチモンジ

月刊むし(186)



当時高校生であった私は毎月の「新昆虫」が楽しみで、この解説を、ときには授業中ひそかに読みふけていたのを思い出します。

1985 「白水隆著作集Ⅰ、Ⅱ」を読んで
やどりが(124)

高山地帯では強雨にたたかれ、溪谷ではヒルの猛攻をうけた困難な行程もこの報文を書く今となつては夢のようである。

1958 大井川水源地方蝶類分布調査報告(第5報)
駿河の昆虫(22)

荒川山塊の主峰東岳は、忍耐力さえあれば誰でも楽しく登山できる山である。

1958 荒川東岳採集記 駿河の昆虫(24)

実に辛い。五体が分解してしまうかのようだ。

1958 荒川東岳採集記 駿河の昆虫(24)

青春の爆発的情熱と、そして開拓的精神とを以って自然に体当たりして行きたい。

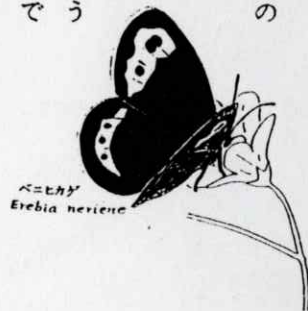
1953 同好会発足に当って 駿河の昆虫(1)

学生のおふれるエネルギーは、社会人をげきれいし、社会人のゆたかな経験は、学生の活動をたすけながら、調査がすすめられました。

1964 静岡県における蝶類分布調査の現状と問題点
インセクトジャーナル(1)

創立当時、私は静岡大学に入学したばかりの学生でしたが、会誌の発行はその会の生命であり、きめられた年発行回数は、たとえどんな困難があろうとも、絶対に守らねばならないという考えをもっていました。

1978 編集後記 駿河の昆虫(100)



内容が正確なものであれば、大学の先生が書いたものでも、小学生が書いたものでもまったく同格に扱われ、ともに学問の進歩に貢献することになります。

1984 短報のすすめ ちゃつきりむし(62)

記録はその時持っていた100円札の裏面の隅に書きつけておいたものである。

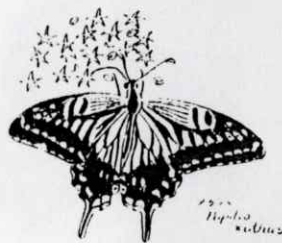
1953 アゲハの排泄行動について
駿河の昆虫(1)

自分は文が下手だからなどと言って仲々投稿せぬ人がありますが、そんな人は尚更文が下手になってしまします。

1953 原稿募集 駿河の昆虫(1)

積み重ねられた資料が新しい理論を創造する。

1958 1958年富士火山の蝶
駿河の昆虫(23)



地方誌の生命は先ずその地方でしか出来ない研究や資料を紹介することで、しかも誰もが気軽に投稿できるものでなければなりません。従って地方誌として中央誌を真似たものや、二三人の限られた人々しか書けぬものは殆んど無意味だと思っています。

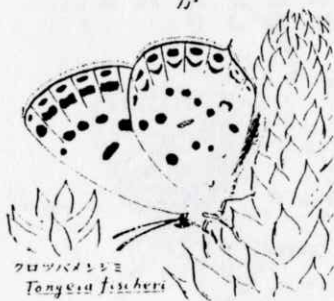
1954 編集後記 駿河の昆虫(7)

同好会活動はまずクラブ活動を基礎とし、クラブ活動は同好会活動によって前進する。

1965 これからの地方同好会のいきかた
ちゃつきりむし(5)

プロがやらないことを同好会がやっていくことに価値がある。

1988 高橋真弓先生特別講演要旨(渡辺通人氏著)
月見草便り(63)



充実した自然史の研究のためには標本を残す必要がある。

1988 高橋真弓先生特別講演要旨（渡辺通人氏著）

月見草便り（63）

支流の違いであっても違う産地の標本は価値がある。同

じ産地でも年が違っていると価値がある。

1988 高橋真弓先生特別講演要旨（渡辺通人氏著）

月見草便り（63）

たとえそれが研究のために採集したものであっても、

また趣味のために採集したものだとしても、その価値に変わりはないはずである。1976 昆虫採集と標本の価値

ちゃつきりむし（26）

標本のデータのしっかりしたものであれば、どんなに痛んだものであっても、その価値はデータのついた完全品と同価値である。

1976 昆虫採集と標本の価値

ちゃつきりむし（26）

“富士山のゴマは黒いが甲府のゴマは青い”ということをよく聞く。たしかにその通りだが、ただ漠然とそう云っていたのでは科学にならない。“なぜそうなのか”ということがわかってはじめて科学になる。

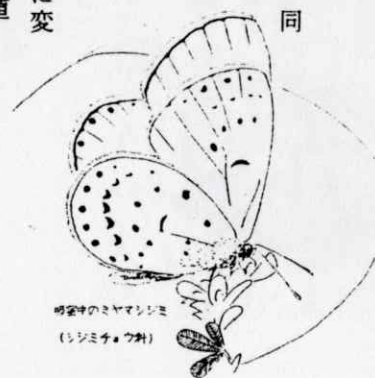
1961 ゴマシジミの地理的変異についての問題

蝶と蛾XⅡ（1）

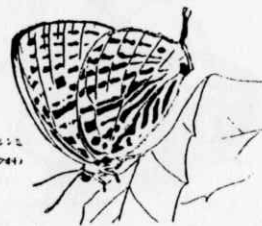
日本にすんでいる殆どどの蝶の種類の生活史の骨ぐみが明らかにされ、幼虫の食餌植物のおもなものも、一応は判明したことになる。しかし、ともすれば、シャールレの中での周年経過を記載するだけで、生態の研究を終れりとする傾向が全くないでもなかった。

1961 蝶の訪花習性に関する覚え書

駿河の昆虫（34）



明室中のミヤマシジミ
(シジミチ・ウチ)



ウチヤマシジミ
(シジミチ・ウチ)

本当の分布論というのは、机上で一朝一夕にして出来るのではなく、苦しい野外調査の実践をつうじて生れるものと信じている。

1969 地方における蝶類の分布研究のあり方
INSECT MAGAZINE (74)

静岡あたりで3月にギフチョウを追いまわすのは、分布調査という見地からは、あまり高等な“戦術”とはいえない。

1969 地方における蝶類の分布研究のあり方
INSECT MAGAZINE (74)

静岡県の蝶の面白さは、“採る面白さ”ではなく、まさに“さがす面白さ”なのである。

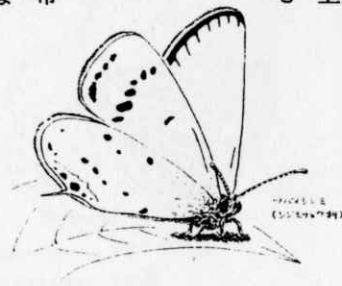
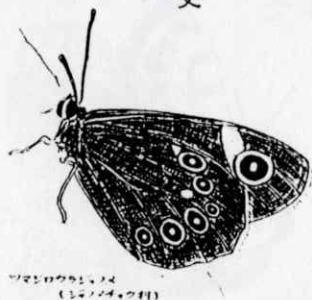
1971 静岡県の蝶類分布 月刊むし4 (7)

石川氏とはとてもき帳面な正確の持主で、その日の日程がどんなにつらくても山小屋のうす暗い灯をたよりに、採集品をその日のうちにきちんと整理しておかずにはいられないほどでした。どんな普通種でも決しておろそかにせず、こくめいな記録を残しておかれました。この態度は、とくにわたしたちが学ばなければならぬところであります。

1963 故石川由三氏追悼号の編集にあたって
駿河の昆虫 (43)

それにつけても、全国有数の富裕県でありながら自然史系の博物館が全県にひとつもないという静岡県の現状は、県民としてまことに恥ずかしいことである。

1990 故稲葉茂氏所蔵蝶類標本目録の発行について
(諏訪哲夫氏と共著) 駿河の昆虫 (149)



そのころ、静岡県の蝶好きの高校生や中学生たちはクロコノマチョウ調査に情熱を燃やしていた。彼らは五万分の一の地図にある神社や寺のマークをたよりに、自転者を利用して次々に分布地点を確認し、見事な成果を上げたのであった。それは、受身で打算的でしらけきった高校生が目につく今日の状態とはまったく異質なものであった。

1981 クロコノマチョウ調査に思うこと
ちゃつきりむし(49)

今日の受験教育は、私には、水を十分に飲んだ馬に、これでもか、これでもかと水を飲ませようとするような愚かな行為に思えてならない。

1979 チョウー富士川から日本列島へ
ただ与えられたテーマをいわれたとおりに器用にまとめる生徒より、たとえ未完成でも、豊かな感受性を持ち、自主的に仕事を進めてゆく生徒を育てたい。

1984 生徒の理科研究発表に思うこと
静岡県高教組新聞(49)

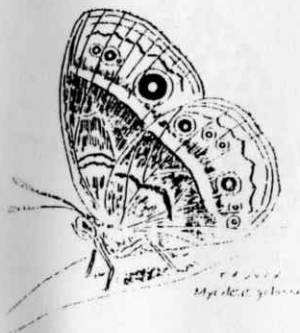
たとえごく小さなことでも、それを自分のものにしようと思つたら、どんなに短くても一〇年はかかる。

1979 チョウー富士川から日本列島へ
こと生物を扱う仕事では、頭の回転の速いいわゆる切れるやつが案外ダメで、少しうすのろのように見えても、同じことをあきもせずによつてるやつが、かえって成功するものである。

1979 チョウー富士川から日本列島へ
私は、理科系を志望する生徒に対しては「大いに芸術に親しみ、感受性をみがきなさい」ということにしている。

1979 チョウー富士川から日本列島へ
生徒に教える前にまずささやかな研究者であるべきだ。教師がひとつの小さな研究テーマをもち、それに打ち込んでいる姿は、なんらかのかたちで生徒に反映するものである。

1979 チョウー富士川から日本列島へ



理科教育の中では、視野の狭いあの“探求の過程”などよりも、生徒たちにもっとじかに自然に触れさせることの方がはるかに大切だ。

1981 クロコノマチヨウ調査に思うこと
ちゃつきりむし(49)

まさに、おどろくべき自然への体験不足が、この「科学技術の進歩」の時代に、子どもたちの間に広がっているのだ。

1987 虫との出会い 昆虫と自然22(11)

「環境」志向それ自体は結構なことだが、野外体験を伴わない観念的な頭でっかちでは困るのである。

1993 昆虫採集の意義再考を

静岡新聞11月11日夕刊

真の愛国心というものは「元号の法制化」などによって育つものではなく、日本の自然を愛することにはじまる。

1979 チョウー富士川から日本列島へ

節度ある採集は人として大切な本当の自然観を育てます。

1991 子供の自然観正しく育てる

読売新聞11月5日朝刊

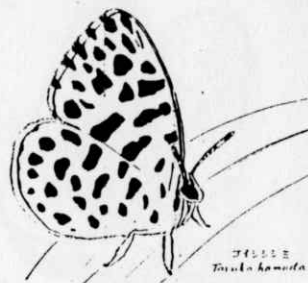
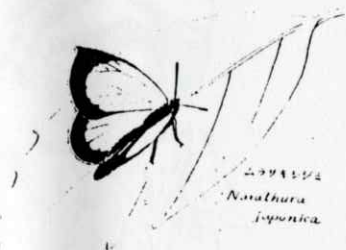
子どもは昆虫の習性や形態を頭ではなく、主として体で感じるものである。手足の筋肉を含む全身で昆虫と“対決”することによってそれらを学びとるものなのである。

1991 子どもの昆虫採集に思う 環動昆3(4)

私は、子供が昆虫を捕まえて昆虫と一体になったときの感動が、その子供にとって将来の自然科学や自然保護思想の原点になりうるものと考えている。

1993 子供と昆虫採集

日本鱗翅学会第4回セミナー資料集



山で昆虫を採っていると、

「虫を採ってどうするんだね?」

「昆虫採集です」

「そうか、昆虫にするのか。えらいな」

というような会話が交わされたものである。

1991 子どもの昆虫採集に思う 環動昆3(4)

高校生から虫を始めるのでは、感性的にはもう遅すぎて
手おくれです。

1993 創立40周年に寄せて

ちやつきりむし(95)

節度ある採集活動には、魚釣りやキノコ採りと同様、健全な趣味としての市民権が与えられるべきものと考えます。

1992 「指針と心得」と「行動目標4ヶ条」について
やどりが(148)

マグロの刺身を食べ、エビの天ぷらを食べている人間が、昆虫がかわいそうだから昆虫採集をするなどというのは、いかにも幼稚な感傷といわれてもしかたがないだろう。

1991 子どもの昆虫採集に思う 環動昆3(4)

採集禁止にしておきながら「高山蝶」を守るための調査をまじめにやろうとしてこなかったこれまでの行政のやり方には、心からのいきどおりを感じる。

1993 本の紹介 信州の自然誌「高山チョウ」

ちやつきりむし(98)

チョウを守ることは、何よりもその生息環境を守ることなのである。一部の町村で行われているような、採集を禁止するだけで環境を守ろうとしないやり方は、本末転倒以外の何ものでもない。

1993 ギフチョウ 滅びゆく日本の昆虫50種



私個人としては、日米安保体制には反対であるし、現在の自衛隊のあり方は憲法違反であると思う。しかし、まことに皮肉なことに、自衛隊の存在が富士の草原を守っている、といわざるをえないのである。理念と現実の大きなずれに心を悩ましているこのごろである。

1986 富士山の草原に思うこと
ちゃつきりむし(69)

富士山を背景にしてウシが草をはむ、管理の行き届いた人工的な牧草地の上で、この黄色いチョウがたわむれる「のどかな風景」は、本来富士山の自然とはまったくあいていないものなのである。

1993 チョウの世界でも「没個性化」が進行中
地球は今 ニュートン13(7)

「個性派」は衰退し、「没個性派」がわがもの顔に富士山麓をこの世の春とばかりに謳歌しているありさまは、今日の日本の社会を暗示しているかのようでもある。

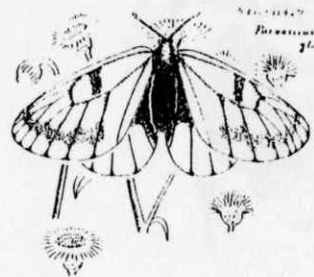
1993 チョウの世界でも「没個性化」が進行中
地球は今 ニュートン13(7)

昆虫に限らずある自然現象について興味を感じ、常に「何故こうなるのだろう」と自分から進んで考えることこそ本当の科学のはじまりであると信じます。科学は「象牙の塔」の中ばかりでなく、日常生活の中からも、もっとたくさん作られなければなりません。

1955 編集後記 駿河の昆虫(12)

日本のように、生物学の研究において、中央の大学は語るにおよばず、多くの地方大学までが、欧米の流行を競って追いかける傾向の強い国では、地味な自然史をメインテーマとしてとりあげる職業的研究者はほとんどいない。1987 クロコノマチョウー静岡県における大発生と分布拡大

日本の生物1(8)



種には形態と機能の両側面が備わっており、それは地球の裏側でも変わらない普遍的な真理なのである。

1979 南米への旅と種の問題

チョウー富士川から日本列島へ

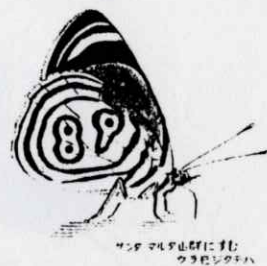
形態だけあって機能がないなんていうものは、干からびた乾燥標本であって生きている生物ではない。また、機能だけがあって形態がない生物などはお化けであって生物ではない（近年の高校の生物教育における生命観の主流はまさにこれだ！）。

1979 チョウー富士川から日本列島へ

種が分化する「瞬間」は、種分化が比較的速く進行する場合には小円の、ゆっくり進行する場合には大円の直線に対する接点にもたとえられ、いずれも「瞬間」であることには変わりがない。

1986 ジャノメチョウ類にみられる二つの種間関係

日本の昆虫地理学―変異性と種分化をめぐって

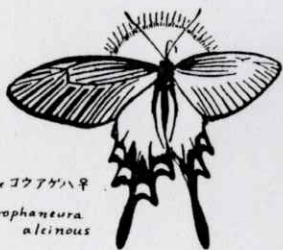


サンゴマダラシロにすし
ウラハシロキハ

今日までアマチュアによって進められてきた日本の蝶学

のなかには、実験も統計処理も不可能な、あるいは不必要な分野も多く存在するように思われる。それはさまざまな角度から蝶を観察し、そこから推論、仮説を引き出して組み立てる作業である。場合によっては、これは仮説とはいえず、その前段階の想像の世界に属することもあるだろう。見方によっては、それは科学的根拠のない空想空論、砂上の楼閣にすぎないのかもしれない。しかし、こういった“想像仮説”は、自然や蝶の世界に対する興味や探求心をふり立たせる偉大な原動力となることだろう。そのなかにはいづれ真理として認められるものもあるにちがいない。

1988 (福田晴夫氏と共著) 蝶の生態と観察



シロゴウアケハ
Atrophaneura
aleinous



新・真弓語録

発行 一九九四年六月一日
編集 清 邦彦

